

## 十四歳の少女が性奴隷にされて

韓国 李容洙  
イヨンヌ

アンニョンハシムニカ。こんにちは。韓国から参りました李容洙と申します。私はこの度、私の身におきたことを詳しく、一つも残さず皆さんにお話ししたいと思います。

### 軍服姿の男に指さされ

私は、弟が四人と私の五人姉弟でした。どこでもそうでしょうが、私も一人娘ということ、父は自分が食べなくても、私に食べさせてくれました。そのくらいかわいがってくれていました。

私はまだ幼い十四歳の時です。友達と川へ魚を捕りに行きました。その時堤防の上から、日本人かどうかわかりませんが、軍服を着た男性二人が私たちを指さしました。一人は白い服を着て、軍人か軍人じゃないかわかりませんが、私達が遊んでいるのに堤防の上から私達に対して指さしているのを見たら、まだ子どもだった私はもう怖くて、その場に父はいませんでした。「お父さん、お父さん」と言いながら一人で逃げたお父さん呼びに行きました。逃げる途中に山があつて、そこに小さい家がありました。中に入るとおばあさんが一人いたので、「おばあさん、かくまってください」と頼んだら、「この子は馬鹿じゃないか。いったい誰が捕まえに来るっていうのかい」と言われました。でも「捕まえに来るから」と言い張り、泣きながら「ちよつと外を見てきてください」

と頼むと、おばあさんは「外には誰もいないから、早く帰りなさい」と言いました。それでも私はとても恐いので、黒いのかまを一着頭にかぶって、顔が見えないようにして走って家へ帰りました。

その日からどのくらいたつてからか忘れましたが、ある日明け方のまだ暗いうちに、だれかが私の家の透かし窓を叩きました。目を覚ましてみると、女の人がいて、「黙って出ておいで」と私を呼ぶのです。家の玄関には戸がなかったので、女は細い廊下に入ってきて、私を引っ張って連れ去りました。おかげで私は木で作られた靴を履くこともできず、裸足のままでした。私が女に韓国語でたずねると、女は「韓国語で話すな」と言いました。連れて行かれたのは堤防で、前に見た男がいました。その男はいつも帽子をかぶっていました。その男と女についていくと、踏切がありました。上を汽車が通り、下を車が通る、そして人がその横を歩くようになっていて、その階段を上っていったら少女がすでに三人いました。その中にいた私の親友が赤いふろしきを渡してくれたので、触ってみると靴が入っているのがわかりました。

#### 韓国語を使うたび死ぬほど殴られる

私たちは四人になり、駅に連れていかれ、窓のない汽車に乗せられました。私はこの時生まれて初めて駅に来たのです。いつの間にか男はいなくなっていました。窓もない汽車なので私にはどこを走っているのかわかりません。

ついに慶州に着きました。旅館に連れていかれたのですが、そこでは私が韓国語を使うと殴られました。私たち五人を、よく死ぬほど殴りました。旅館の前にきれいな川があって、私はよくそこで泣いていました。ある日手を洗っていると、そばに青いきれいな花が咲いていました。旅館の息



李容洙さん

虐待されながら、慶州から平壤、「満州」の大連へ

子が十三、四歳だったと思いますが、彼に「あれは何という花ですか」と韓国語でたずねたのです。かれは「トラヂ(桔梗)」と教えてくれました。その花は小さくてとてもかわいい花だったので今も覚えています。旅館に入ると「なぜあいつと韓国語で話したのか」といって、私たち全員を太い棒で殴りました。歩けなくなるほどでした。そのうち少女がもう二人連れてこられて七人になりました。そしてまた汽車に乗せられました。また窓もない汽車だったので、酔って私は気持ち悪くなり、頭もお腹も痛くなりました。汽車の割れ間から私の家が見えました。私は声を出して「お母さん、お母さん、助けて、私はどこに連れていかれるの」と叫びました。家のちょうど前を通ったときはお母さんの名前を呼び、「助けて、助けて」と泣き崩れました。すると、男は私の後ろから髪をつかみ、頭をがんがんに打ちつけて怒りました。

どうして日本人は、まだ子どもの私を連れていったのですか。私が背が高かったからでしょうか。今はもう六十八歳ですが、その頃は十四歳で、とてもかわいらしかったです。ただ連れていくだけじゃなくて、殺すつもりのように殴るのです。なぜ日本人はそんなひどいことをしますか。

平壤に到着しました。連れていかれた家には、年を取ったおばあさんがいて、そこに井戸がありました。ポンプを使ったことがないのに、ポンプを使わされ、誘い水をしなかつたのです。「誘い水も入れることができない」といって怒られました。また太い棒でよく殴られました。お腹も空きました。それでりんごのようなものを盗み食いたり、草を食べたりしていつもひもじい思いをしていました。そのうち、二人の少

女がどこかへ連れて行かれ、私たちはまた五人になりました。今考えると、十月に連れていかれたのにもうとても寒い思いをする十二月になっていました。大根や白菜を採りに行けと言われましたが、したくない私はいつも上手にできなくて、足で蹴られ、なぐられて怒られています。今から思うと、いつも足を殴るのは逃げられないようにするためだったのでしょう。そして友だちと韓国語で話したら、また殴られました。

一カ月位すると、今度は「満州」の大連に連れていかれました。大連には船が十一隻も泊まっています。そこに一晚泊まって、次の日は船に乗せられたのです。慶州へ行く時も、平壤へ行く時も汽車に乗せられていったけれど、また舟に乗ったら家へは帰れないと思って、私は友だちに聞きました。舟に乗ったら、もう家へ帰れないでしょうと。けれど、友だちは「帰れるよ。戦争中だから汽車に乗って行けないだけ」と答えました。船には先に日本の海軍の兵士が三百名程乗りました。みんな二十歳前後に見えました。最後に私たち五人が乗ると、一番下に行けと言われました。私はまだ子どもだったので何も知りませんでした。

#### 船中で殴られ強姦される

朝、港から船に乗った時には、さすがに、何も知らない私でも今度はもう家へは帰れない、どこかに連れていかれて殺されるだろうなと思いました。その時私は天に向かって、「神様、私は死んでもいいけれど、私の父、母、弟たちはご飯をいっぱい食べられますように。いい家に住めていい暮らしができますように」と泣きながら祈りました。どこをどのくらい行っただかわかりません。一九四三年十二月頃でした。ある日目を覚ますと、今日は日本のお正月だから下にいる娘たちも上へ来



南方へ向かう輸送船の中には兵隊とともに「慰安婦」もいた。(金一勉編著「軍隊慰安婦」徳間書店より)

て歌を歌ってくださいと言われました。それで私が行きました。上がってみるとそこは上海でした。「何にも言えず靖国の宮のきさわし……きれふせばあつい涙が出る時をそうだ感謝のその気持ちその気持ちが国守る」、もう一曲「あの山陰にも」も歌いました。そうしたら米で作った餅を二つくれました。とても嬉しくて、それを持って船倉に戻り、五人でわけて食べました。「今日は正月らしい。どこの正月かわからないけど、出ていって歌をうたったら、この餅をくれたよ」。

この時は戦争がひどい状態で、船は夜の間に進めませんでした。十一隻並んで進んでいたうち、私たちは一番最後の船に乗せられていました。ある日船がひどく揺れて、こちらにいたらあちらの端に飛ばされ、今度はまたこちらに飛ばされるといっぐらい激しく揺れました。このまま死んだほうがいいと思いましたが、死ぬ運命でなかつたらしく死ねませんでした。生き延びながら、船酔いのためにトイレに這っていてもどしました。その時、そこに海軍の軍人が来て私をトイレの中に閉じ込めたのです。私が抵抗して腕をかむと軍人は怒って私を殴り飛ばしました。そのまま私は氣を失ってしまい、その軍人が何をしたか分かりませんでした。暴行されたのかどうかもわかりません。友だちが来てくれました。でも私たち五人は全員が、下のところが血にまみれていました。それがなぜなのかも、まだ子どもで分かりませんでした。私たち全員がそう

いう目にあつたのです。

#### 台湾で連れていかれた慰安所

前の船が爆弾にあつて「助けてくれ」という声がよく聞こえました。それで船が沈んだ時のためにと救命服が配られました。でも、どうせ海に落ちたら死ぬんだからと、五人で服を結んでトイレに行く時は全員で行きました。それでもトイレへ行ったら、海軍の軍人は大勢でかかつてきて、悪いことをされました。でも、恐怖と辛さで頭が痛くてよく分かりませんでした。「この船もすぐやられるぞ」という声があった時、天に向かつて「お父さん、お母さん、あなたの娘はもう死にます」と祈りました。もう皆食べ物も喉を通らなくなりました。それでも、船は台湾に着きました。私たちが降りた後また出航したその船は、爆撃でやられてしまったと、あとで聞きました。

台湾で連れて行かれたところが慰安所でした。大連から私たちを連れてきた男が慰安所の経営者だったのです。中に入ると十人ぐらいの女がきれいに着物を着ていました。そして私たちを見た一人のきれいな女の人が、一番年下だった私に韓国語で、「あなたはできないよ。こんな子どもなのに。あなたは私の妹みたいだから、私が隠してあげよう。あなたは絶対出てくるな。こんなことするな」と言つて、その人が背中に隠してくれました。三日ぐらい後、その女が出て行った後で、「さっきの女と朝鮮語で話しただろう」と殴られたうえ、「その女をさがせ」と言われ、二人ともひどく頭を殴られました。

## 軍人を拒み電気拷問を受けて

主人に連れられて行くと、一つ一つ部屋が区切られているのにドアがなく、仕切りにただ毛布がつるしてあるだけでした。「ここに入れ」と言われ、見ると中に日本の軍人が一人いました。「行かない。そんな部屋入る必要はない。あなたの言うことなんか聞かない」と答えました。するといきなり髪をひつばられ、暗い部屋に連れ込まれ、腰を蹴飛ばされました。げんこつで頭を「殺してやるぞ」となぐられました。刀で太股を削りとられました。その瞬間は血も出なくて白い肉が見えませんでした。腰を蹴られるととても痛くて、気を失うほどでした。そして両腕に線を巻かれ電気拷問を受けました。その時韓国の言葉で「オンマ(お母さん)」と叫びました。すると「なぜ韓国語を使う！朝鮮ピー」と、もつと電気を流されました。その部屋にいた軍人は私が殺されると思ったでしょう。

友だちが薬や食べ物を持つてきてくれました。でも私は意識がありません。お粥を食べさせようとしても食べられないので、自分の腕を飲んで血を飲ませてくれました。そうして看病してくれて一カ月ぐらい後、少し意識が戻って「オンマ」と言ったそうです。友だちはとても喜んで、また腕を飲んで血を飲ませてくれました。友だちがその軍人に私の様子を話すと、彼は「じゃ連れてきなさい」と言ってくれ、私をどこか後ろの部屋に隠してくれました。一カ月ぐらい栄養剤などを飲ませてもらい、私は少しずつ元気になることができました。私とその長谷川という軍人のところへ行くと、彼は「あなたも私もお互い被害者だ。自分は国のために来たけれども……。あなたは名前は何なんだね」と聞きました。「ない」と答えると「じゃ安田トシコにしよう」とつけてくれました。そして「私は特攻隊なんだ」と教えてくれました。「特攻隊って何ですか」と尋ねると「二人飛行機に乗ってどこかで敵の船を見つけて突っ込むんだ。もう決めている」と言いました。彼は偉い人です。

た。ずっと私のところへ来て、守ってくれました。自分が来れない時は彼の部下が来てくれました。横の部屋の女のところに行つてこちらを守ってくれました。一カ月か二カ月そうしてくれたのです。私はまだ体が悪く軍隊の相手はできませんでした。

ある朝ご飯を食べていると、敵がやってきたので防空壕に逃げ込みました。私ともう一人は、一番奥の防空壕に入りましたが、他の人は外に逃げました。爆弾が落ちて家がつぶれました。それでもまだ生きていました。友だちを呼ぶといなくて、私はまだ力もないし、病気にもかかったし、マリヤにもかかっていました。友だちが土をほると穴が見えました。けれど爆弾の煙を吸ったら、口や鼻から血が吹き出しました。今度こそ死ぬと思いましたが、友だちが土を掘って、大きな穴をあけて外へ引きずり出してくれました。出て行つた私に長谷川さんが教えてくれました。一緒に連れて来られた少女たちの一人と最初に私を自分の妹だといつてかばつてくれた女の人が爆弾にあたつて死んだことを。その少女が私に血を飲ませてくれたことも、長谷川さんから教えられました。私を捕まえてきた主人のお妾さんも死にました。

私は病気だつたけれど、まだ軍人の相手をしなければなりませんでした。もうすぐ一九四五年になる頃でしたから、戦況はひどくて、病気であっても軍人の相手をしないといけません。特攻隊の人を毎日四、五人相手しました。あまり多くなかったです。特攻隊の人はジェットルマンでした。

ある日、長谷川さんが来て二日間一緒にいました。「私は明日か明後日飛び立つ」。私は長谷川さんがいなくなつたら死んでいた身ですから「私も死ぬ」と言いました。もう家族とも会えないし、長谷川さんは私を愛してくれて、とてもよくしてくれていましたから。でも、「私はお国の為に死ぬのだし、飛行機に女は乗せられないんだ」と断られました。そして夜、堤防で、彼は洗面道具と写真



を一枚くれました。また自分が作った歌も教えてくれました。「幹候(幹部候補生)離陸よ新竹離れ、金波銀波の雲乗り越えて……、連れだつて見送る人さえなけりや、泣いてくれるはトシコが一人」そして並んでこういいました。「トシコ、絶対死んではいけない。自分が死んで幽霊になつてもトシコをお母さんの胸に抱かせてあげる。トシコは百年生きなさい。百年後に天に來なさい。天で会いましょう」。そして星を見ながら「とても大きい星は偉い人、小さい星にはトシコのお父さん、お母さん、トシコ、それに俺もいるよ。明日になつて一つ星が落ちたら、私は死ぬよ。でもトシコは絶対死なない。お互いが被害者なんだから」。私は台湾で淋病をうつされました。長谷川さんにもうつしましたが、彼は「トシコのお土産だから持つていく」と言っていました。彼は「トシコは自分の初恋の人だから」と言い、いつまでもいつまでも待つていると言いました。

#### 解放され、着のみ着のまま祖国へ

十四歳で連れてこられて十七歳になつた時、誰かが戦争が終わつたと言つたのです。五人だつた私たちは四人になっていました。解放された。私はそのとき、韓国と日本が戦つて、韓国が勝つたんだと思ひました。日本とどこが戦争しているかも知らなかつたから。防空頭巾をかぶつて、「韓国が勝つたんだ!」と言ひながら、誰かが私たちを収容所に連れていきました。そこでもらつた握り飯は、虫が入つていて真つ黒でした。そこから船が出ると言われたのですが、私はまたどこへ連れていかれるか分からないから乗るのは嫌でした。でも、三人の友だちが「行つても行かなくても死ぬのなら、行つてみましょう」と言うので、船に乗りました。そして、船は釜山に着いたので、降りるとDDTをかけられて、三百円くれました。家に帰る汽車代もなかつたのです。そして大

邸に着き、家へ走っていくと、母が何かを拭きながら弟を呼んでいました。「今日はあんたの姉さんの四回目の法事なんだから」と。母は私が死んだ日も分からないので、思い出すと勝手に法事にしていたようです。私が「お母さん、お母さん」と言うと、母はびっくりして気絶してしまいました。

「従軍」でも「慰安婦」でもない、踏みにじったのです

私がなぜ今もこういうことを忘れないで話すのかというと、今の日本の政府は私たちを強制的に連れて行って踏みにじったのに、それも償おうとしないからです。彼らは自分たちで「従軍慰安婦」と名づけましたが、私たちはそれさえ知りませんでした。六月二十七日に日本に来て、七月一日に私は夢で、母に「私は『慰安婦』にされていたんです」と初めて打ち明けました。でも、「慰安」なんて字が入るようなものではありません。私は「従軍」という意味が分かりませんでした。七月三日に日本の人に聞くと、その人はいい意味だと言いました。しかし「従軍」というのは、自発的に行った、そして軍人を喜ばせた、安全なセックスをした、そういう意味じゃないですか。私たちを無理やり連れていっておきながら、そして一生を踏みにじったのに、こんなことを言うなんて、私たちを二度殺すようなものです。私があなたたちに何故一から十まで話すのかと言うと、すべてが強制だからです。今でもまだ侵略戦争でないとか言うんですか。私は侵略戦争を体験した、生きている被害者です。

前は、日本に来て証言するときは、韓国と日本は兄弟の国、親しくしましよと言いましたが、最近はその言えません。私はどんなことをされても民間の人は許します。もともと血圧は高くなかったのに日本の政府が苦しめ、ハルモニ(おばあさん)被害者たちを馬鹿にして、私たちをもう一度

殺そうとするので高くなりました。日本の人たちは許せませんし、罪はありません。また長谷川さんのようにいい人もいます。彼は私の命の恩人です。彼がいなかったらもう生きてはいなかったでしょう。しかし日本の政府とその犯した罪は絶対許せません。

日本中くれても要らない、一言謝罪を

昨年八月から「民間基金<sup>\*1</sup>」とか涙金とかいいながら、侵略戦争でなかったとか言われたでしょう。今は「女性のためのアジア平和友好基金」とかいうでしょう。この前国連の集まりで日本に来た時、新聞記者が来て、「昨日始まりましたね」と言いました。「始まろうが始まるまいが、私には関係ありません。ここまで来てそんなことをいうんですか」、こんな馬鹿な話がありますか。まだ子どもだった私たちを強制的に連れて行って。今の十四歳の人以上に昔の十四歳は子どもです。何も知らない子どもだったのに強制的に連れて行かれ、そして死ぬか生き延びれるかも分からずに、一生懸命生き抜いてきたのに。賠償責任はないとか交渉済みとか、なんです。自分が強制的に連れて行って「従軍慰安婦」をさせて、責任もとらないで。こんな馬鹿なことを言うのは私は絶対に許しません。私たちが被害者はみんな覚えています。今までは私たちが日本に来て話をし、日本がどうするのか見ていました。しかし今はもうそうじゃありません。韓国でも、いつまでも日本がこんな悪いことをしているから、韓国でなんとかしないといけないから、現在病気になる人は、病院で死ぬまで大統領は何でも無料にしてくれました。私も六月に来てから、ずっと血圧が高くなって、このまま死んだら、あなたたちが日本中くれても私たちは要りません。何をくれても要りません。考えてみてください。自分の娘の身に起こったこととして考えてください。私は許せません。

村山総理にも言いました。国会に行つて、入つて、「村山さん立ちなさい。韓国人被害者が来ました。立つて一言言いなさい」。国会の職員が私を横へ連れて行きました。ロビーで話をするからと言いながら。けれどまた別の職員が連れていこうとしました。私はそこで耐えきれず暴れたんですが、「何が恐いことあるか。あなたは日本では偉い人ですが、私たちにとっては偉くないよ」。

神経が高ぶると私の体には悪いですが、あなたたちには分らないでしょうから、私は言います。あなたたちの日本の政府はうそつきで本当に悪いです。それを分かってください。「従軍慰安婦」というと自ら行つたように聞こえますが、ほんとうは強制的に連れていかれ、性の奴隷だった、その本質をしつかりと理解してほしい。そして日本政府がそれを認め、一言心からの謝罪をしてもらいたいのです。

\*1 民間基金 一九九四年八月、村山政権が打ち出した「従軍慰安婦」問題の解決方式。民間から募金を集め被害者へ見舞金として支払う構想で、政府は事務費のみを負担し基金そのものには出費しないことを「与党五十年問題プロジェクト」で追認、翌一九九五年七月十九日に正式に発足した。前参議院議長原文兵衛氏が理事長に就任して八月から募金を開始したが、基金の集まりが悪いこと、首相の交替、性奴隷（慰安婦）制度を日本の戦争犯罪とする国連人権委員会の決議、被害者とその支援団体の拒否などによる困難が山積している。「女性のためのアジア平和友好基金」が正式名称。